「人柱になったおから」

おからど母親ど、父親どご探すために、ずーっとまずまず旅したもんですけおな。旅して行って、ひとなえ（他人の家）の軒ばしで休だり、夜を明がしたり、そして雨風に当だって、よっくに疲えで一週間どが一〇日もそうして歩いて、よぐよぐ疲れでしまって、何ともならなくて、こんだ（今度は）川原さ下りでずっと歩いたっけ、「どさ行げば村あるべな、早ぐ母さんどご休ましぇねばねども困ったな」って、そうして行ったば川上から箸が流れで来たもんだがら、「アーア箸流れで来た。こえなば人家があるなだな。えがったな。したら行ってみら」ってそえまでお母さんど一所懸命ど歩いて行ったば、村あって、村のおっきた庄屋の家さ行って、



おから地蔵

「何とが庭のす（し）ま（隅）でもええがら貸して下さい」って。

「あぃ、可哀想だごど」ってそごさ薬敷いで、その上さ休めで、そして看病したって。そしたば一週間もしたば、その母親も死んでしまって、そごなえの家で葬式出してけだし、その子どごぁ、何ともどうにもならなくて、そごな家で、おれ家のおっるど一緒にして、姉妹にして一緒に育でるがらって育でけだんだけおな。そしたっきゃある時、大雨風吹で大雨降って、何日も何日も続だでぉ。止まらなくて止まらなくて、沢の奥におっきだ（大きな）つつみ（堤）あって、その堤の土手が破えれば、村中流えるだげの大水来るはで、村中して俵さ土つめだり砂つめだり、そごさどんどど埋めだんだども、流えるなえっぺで何ともかんともならねくて、とにかくえなば人質さねばなんだって。人質上げねばねごどなって、そえで庄屋の娘どご上げねばねぐなったども、その時おからでもな、おれごご家で育てで貰って、今迄恩あるはで、おれどうしぇえだたて、親もえねあだはて、おれどごその代りにやってけれどて、願ってその娘、土産ど一緒になって入れだば、雨、あどダダッと止めで、その村それで落ちづだ（落ちついた）って言う話だもんだがら、その庄屋の家で、そのおからど、このままにしておがえねって、村のはずれの方さ、地蔵様建でてけだ。したはって、どごの村さ行っても、白石で刻んだ地蔵様は、そのおからだがら、えっつでもそのおからどご拝んでけれど、しゅった（言った）どてな教えであったなや。子供ながらに聞いだもんだがら、しみじみ、んだてか、こだてか、聞きげす（聞き返す）ごどねがったもんであったがら。